

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531190

研究課題名(和文) 批判的リテラシーを育む問題解決学習におけるプロセス評価方法の開発

研究課題名(英文) Development of the way of assessments focusing on the learning process of problem solving studies which nurture students' critical literacy

研究代表者

荒井 紀子 (ARAI, Noriko)

福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号：90212597

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、批判的リテラシーを育む家庭科の問題解決学習とその評価方法について、現状の分析と開発を以下の4点から実施した。1) 探究的学習の枠組みの理論的整理、2) 米国、北欧の先進的な家庭科授業の事例についての調査と分析、3) 日本において問題解決の学習に積極的に取り組む家庭科教師にヒアリングを実施し、特徴と課題を把握した。さらにこれらをもとに、4) 小・中・高校において、パフォーマンス評価をとり入れた問題解決学習を開発し、結果を検討した。探究的な学習プロセスを軸として、生徒自身に目標設定と評価活動に取り組ませることは、生徒の探究力を高めるうえで有効であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes and develops the assessment method of home economics, focusing on the learning process of problem solving studies that nurture students' critical literacy. The main items and findings of this research are as follows: 1) Analyzing the basic theory of the learning assessment, 2) investigations of the leading lessons of home economics in American and Swedish junior and senior high schools by means of school visits and interviews to teachers, 3) surveying home economics teachers in Japan who are actively coping with problem solving studies, 4) developing, implementing, and validating problems solving programs and performance assessments in home economics. Students' active involvement in setting their own learning goals and making assessment by themselves on the process of learning were effective in developing their thoughts and investigative literacy.

研究分野：教科教育学、家庭科教育学

キーワード：問題解決学習 実践的推論プロセス シティズンシップ 家庭科教育 パフォーマンス評価 プロセス評価 批判的思考 探究学習

## 1. 研究開始当初の背景

世界的なグローバル化の進展の中で、持続可能な発展や各国協調による社会の安定化と平和の維持は、すべての国にとって重要な課題であり、それに取り組む力を育成する教育が求められている。ここでいう力(能力)とは、問題を多角的な視点から偏見なく検討する批判的思考力や問題解決力であり、その力を培うためのカリキュラムや授業の理論的検討と実践による検証が必要となる。と同時に、そうした力の習得を測り評価する方法の開発も行う必要があるが、探究的な学習の開発とその評価を併せて検討する試みは、これまで殆どなされていない。家庭科において、批判的思考力や問題解決力を育む授業の構造を理論的に解明するとともに、問題解決学習の意思決定プロセスにかかわる評価方法の検討をおこなう必要があるとの問題意識のもとで研究に取り組んだ。

## 2. 研究の目的

本研究は、家庭科教育における批判的リテラシーを育む問題解決学習の開発を視点として、以下の3つの研究を行うことを目的としている。

(1) 批判的リテラシーや判断力を育む学習とその評価方法について理論的整理をするとともに、それを家庭科教育で展開する場合の方法と課題について検討する。

(2) 米国、北欧における批判的リテラシーを育む問題解決学習およびその評価方法について、理論と実践の両面から検討するとともに、各国の研究者との交流連携を深める。

(3) 探究的、問題解決的な学習とその評価に取り組む教師の意識や課題について明らかにする。

(4) 評価方法としてのプロセス評価に着目し、日本の小、中、高校の家庭科において探究的学習とその評価方法についてモデル授業を開発し、実践を通してその結果を検討する。

## 3. 研究の方法

上記それぞれについて、以下の方法で研究を行う。

(1) 批判的リテラシーや判断力を育む学習の評価方法、特にパフォーマンス評価について、内外の文献を収集・分析する。

(2) 米国、北欧の問題解決的授業のカリキュラム理論と評価方法の実際について現地調査を行い、家庭科教育研究者、教師へのヒアリングと資料収集を実施する。同時に、米国、北欧で優れた実践を行っている教師や研究者を招聘し、シンポジウムや講演会を企画するとともに日本の教師や学生との研究交流を行う。

(3) 探究的、問題解決的な学習に取り組んでいるスウェーデンや日本の家庭科教師(小

学校、中学校、高等学校)を対象に、学習とその評価についてヒアリング調査やアンケート調査を実施する。

(4) 研究代表者、研究分担者が在籍する各大学を拠点に、各所在県の小、中、高校において、探究的学習のプロセスに着目した授業モデルを開発し、実践する。

## 4. 研究成果

(1) 米国、北欧における問題解決学習の理論と実践

### 1) 米国 オハイオ州の高校家庭科の事例

米国では、1980年代に家政学者のマジョリー・ブラウンが、ハーバースの行為理論に基づいて批判的リテラシーを中核に据えた家庭科の理論的枠組みを提示した。そうした中で実践的推論プロセス(Practical Reasoning Process)を重視したカリキュラムモデルが開発され、家庭科教育のパラダイム転換に大きく寄与した歴史がある。

オハイオ州は上記理論によるカリキュラム開発を先駆的に実施し、大学教員(研究者)のリーダーシップの下で教員研修等において実践の普及を図ってきた。

本研究では、実践的推論プロセスが実際の高校家庭科の授業でどのように展開されているのか、明らかにするとともに、問題解決力の育成に有効な手立てが何かを把握しようとした。

具体的には、オハイオ州 Bellefontaine 高校家庭科の授業参観及び担当教師 Marybeth Motasem 氏へのヒアリングを実施した。なお、参観した授業の概要は以下の通りである。

日時：2012年10月1日・3日

各1授業時間(80分)

対象：10年生(一部上級生を含む)

21人(男子13人・女子8人)

科目：フード1(選択科目)

単元：ファミリー・ディナー・チャレンジ・プロジェクト

授業内容：

- ・高校近隣の実在するタイプの異なる6家族に夕食を提供する
- ・家族の健康上のニーズや家計を考慮し、献立を作成する
- ・コスト計算を経て食材を選び、実際に調理して家族に提供する
- ・家族からの評価を受ける

授業は、REASONモデルを活用した実践的推論プロセスに沿って展開されていた。REASONモデルは、次の6ステップで構成されている。

R=1.問題を認識する

E=2.問題解決のための情報を評価する

A=3.選択肢とその結果を分析する

S=4.最善の選択肢を選ぶ

O=5.行動のための計画を立て実行する

N=6.結果を記録する

授業では、問題解決のために必要な知識・情報を一元化した資料集が提示され、問題の

認識から結果の記録・振り返りまで一連の学習活動を見通せる展開となっていた。また、ルーブリックが効果的に活用されており、作成には生徒が参加して、評価項目・規準を共有していた。

さらに、地域の実情や生徒の生活実態に基づくテーマが切実感のある問題解決を実現させており、その際、地域の資源が有効に活用されていた。

こうした問題解決学習のメリットを担当教師は「実生活にあてはめて考えられるため、生徒のモチベーションが高まる」と捉えており、学習の中で「仲間との協力が増え、創造性が養われる」だけでなく、「批判的リテラシーが身につく」と評価していた。

(学会発表3)

## 2) 北欧 スウェーデンの中学校の事例

### [目的]

スウェーデンでは思考を促す学習が、実際の授業のなかで具体的にどのように展開されているのか、また、教師や学校はどのような考え方のもとに実践し、評価が行われているのかについて家庭科教師マリア・フェルド (Maria Feld) 氏の実践をもとに明らかにした。

### [方法]

1. 授業参観および資料分析：2010年10月4日および2011年10月28日に、ストックホルム市ホグサトゥ中学校にて、家庭科の授業を参観し、授業用資料等を収集した。

2. 授業担当教師へのヒアリング：2010年10月4日および2011年10月28日に、授業者であるマリア・フェルド氏にヒアリングを行った。ヒアリング内容は、参観した授業について、家庭科の学習内容や授業づくりについて、学習指導要領(シラバス)に対する考え、評価等である。ホグサトゥ中学校の教育については、校長による補足説明があった。

### [結果および考察]

1. 2010年に参観した授業の概要

1) 日時：2010年10月4日 12:30～14:30、1コマ(120分)

2) 対象：中学校8年生(日本の中学1年生)10名(男子5名・女子5名)(24名のクラスだが、調理実習は半数ずつ行っている)

3) 題材名：栄養バランスを考えた3品の調理実習

4) ねらい：

- ・栄養のバランスを理解する
- ・バランスを考えた簡単な調理ができる
- ・導入学習なので調理に慣れる

5) 授業の流れ：)栄養のバランス3分類について、紙製食品模型を用いて、教師が様々な状況を示し、過不足やバランスについて問いかけながら復習する。)「サーモン・ポテト・野菜」と「リンゴのデザート」の組み合わせで、「野菜」「りんご」「ポテトのつぶし方」について、教師の用意した材料(玉ねぎ、にんじん、グリーンピース、りんご)を選択して、グループで調理法を考えて調理する。

)試食し、出来上がり図・内容をプリントに記入する。)PCソフトを使って作った献立の栄養を分析し、プリントに記入する。)グループごとに洗い、片付ける。



## 2. 授業およびヒアリングの考察

○次のことを重視していた。

- ・生徒に考えさせ、リフレクトさせる
- ・何をどう食べるか考えさせる
- ・教え込みでなく、一人ひとりとコミュニケーションをとりながら、いろいろなやり方を認めながら、自信を持たせて向上させる

○具体的には次のような場面が見られた。

- ・年齢や生活状況など多様な生活場面に応じた食品の組み合わせについて、生徒に問いかけ、食品模型の組み合わせをいろいろ試しながら考えさせている。
- ・指導計画以外でも、状況やタイミングをとらえて、教育のあらゆる場面で生徒に思考させ判断させることを意図している(ベジタリアンの場合の肉の代用、腐りかけた玉ねぎへの対処等)
- 食事を作ることから、消費者教育や環境教育につなげ、社会の問題を明示している。
- 2000年シラバスで示された枠組(健康、リソースマネジメント、ジェンダー、文化)を、常に学習の視点に入れて、視野を広げて考えさせようとしている。
- 地方行政カリキュラムには、「教育において生徒の参与を増やすようにする」と明記され、学校評議会は教員・保護者・生徒の代表・校長から編成され、学期に2回会議をもっている。
- 生徒は、学校のeランニングシステムで、テストの問題を見て自学自習できる(到達目標型の理念)。(学会発表5)

## 3) 海外研究者・実践家の招聘と研究交流

2013年7月に、スウェーデンのウブサラ大

学教授の Karin Hjalmskog 氏、ホグサトラ  
中学校家庭科教師 Maria Feldt 氏、および米  
国オハイオ州の高校家庭科教師 Marybeth  
Motasem 氏を招聘し、大阪、福井、金沢で以  
下のような国際シンポジウムを開催すると  
ともに研究交流を行った。7月7日、於大  
阪大学中之島センター：「生活者を育てるス  
ウェーデン、アメリカの教育 子どもの思考  
を引き出し問題解決力をつける家庭科」をテ  
ーマとする国際シンポジウムを開催。7月  
11日、於福井大学：「スウェーデンにおける  
消費者市民（コンシューマー・シティズンシ  
ップ）を育む教育」をテーマとするシンポジ  
ウムを開催。7月13日、於金沢市福祉用  
具情報プラザ：「北欧、米国における家庭科  
教育 思考を引き出しシティズンシップを  
育む授業」を開催。これらに加えて、大阪教  
育大学、福井大学において Merybeth Motasem  
氏による学生・研究者対象の公開研究会、福  
井大学附属中学校での授業参観と研究討議  
を行った。（雑誌論文 1）

## （2）家庭科における探究的な学習への取 組みと課題 面接調査から

### 【目的】

家庭科における問題解決的な学習の実態  
と課題について、現場教師に対するヒアリン  
グ調査によって明らかにする。家庭科で問題  
解決的な学習を実践するにあたって教師に  
求められるものは何なのか把握することで、  
大学における家庭科教員養成カリキュラム、  
あるいは現場教師に対するエンパワーメン  
トプログラムを提案するための基礎資料を  
得ることを目的とした。

### 【研究方法】

調査時期：2011年～2015年

調査方法：半構造化ヒアリング調査

60分～80分/人

調査対象：石川県・大阪府・富山県・福井  
県の家庭科教師（小3名、中2名、高3名）

調査項目：問題解決的な学習の具体的な実  
践の様子、児童・生徒の学習の効果、学習  
の評価方法、実践するにあたっての課題

### 【結果と考察】

問題解決的な学習の認識について

問題解決的な学習は、「既成概念を問い直す  
ことで問題状況を自覚させる」「問題の存在  
に気づかせるところがポイント」であり、  
「葛藤させながら多様な視点を身につけて  
いく」「生徒とともに授業をつくりながら進  
めていく」ものとして捉えていた。

実践した問題解決的な学習のポイント

「探究する場・体験的に試す機会を保証す  
る」「生活感覚を軸におく」「解決のための選  
択肢は多様に提示し、意思決定するまでのプ  
ロセスの重要性を伝える」「子どものリアル  
な生活場面を具体的に題材として取り上げ  
る」「問いを重ねながら児童・生徒を追い込  
み、どうすればよいか考えさせる」などの発  
言があった。

問題解決的な学習の効果

「他者と関わり学び合うことで学習が深化  
する」「失敗経験や試し活動によって探究の  
目的が明確化し、意欲的・主体的な学びにつ  
ながる」「グループ学習によって多様な価値  
を認め合える」など、多様な学習効果が挙げ  
られ、多くの可能性を見出していた。

問題解決的な学習の課題

「時間の確保」「探究活動ではインターネット  
リテラシーが不可欠」「生徒の関心の方向  
性をキャッチする」などが挙げられた。

評価について

ポートフォリオやワークシートの記述など  
を利用しているが、すべての教師が、問題解  
決的な学習の評価については困難を感じて  
おり苦悩していた。在学中の授業や教員研修  
での学びの機会を求めている。

【今後の課題】

他の調査も含めてこれまで行った調査結  
果を反映させた教員養成カリキュラム、現場  
教師に対するエンパワーメントプログラム、  
および評価方法を開発・試行・検討し、その  
成果を評価・提案することが今後の課題であ  
る。（学会発表 9 他）

## （3）探究的、問題解決的授業、およびプロ セス評価方法の開発と検討

研究代表者、研究分担者の所属する大学の  
附属学校および地域の小学校、中学校、高等  
学校において、家庭科教師と協働して問題解  
決学習や思考力を育む授業モデルを開発、実  
践した。いずれにおいても、生徒が解決策を  
求めて探究する学習プロセスを重視し、そこ  
で実際に児童、生徒の思考や判断を促す学習  
構造を設計し、実践結果を検討した。また、  
その一部において、学習プロセスを生徒自身  
が省察するパフォーマンス評価を導入した。  
開発した授業を以下に示す。

### 1) 小学校家庭科の授業モデル開発

○制服の暖かい着方について問題解決とパ  
フォーマンス評価を組み入れた授業、対象：  
大阪教育大学附属小学校5年生（雑誌論文  
10）

○オリジナルバッグを試行錯誤して作り上  
げる過程をとおして考える力を育む授業、対  
象：金沢大学附属小学校6年生（雑誌論文 6）

### 2) 中学校の授業モデル開発

○中学生と幼児との交流を中学生自身が企  
画・実行する保育分野の授業、対象：金沢  
大学附属中学校3年生（雑誌論文 19）

○思考のつながりを意識した食生活分野の  
授業、対象：福井大学附属中学校2年生  
（雑誌論文 7）

### 3) 高等学校「家庭」の授業モデル開発

○高校生が自分自身と家族の問題を見つめ、  
将来について探究的に考える授業、対象：福  
井県立福井農林高等学校1年生（雑誌論文 9）  
○住生活分野で、「15年後の自分のすまい」  
をテーマに、授業設計や地域での暮らしにつ  
いて考えさせ、パフォーマンス評価をとりい

れた授業、対象：福井県立農林高等学校1年生  
(学会発表 4)

#### 4) 特別支援学校の授業モデル開発

○衣生活のファッションを考えることで表現や意思決定の力をつける授業、対象：金沢大学特別支援学校高等部生徒(雑誌論文 11)

上記の授業の内、小学校の2つの被服領域の学習、中学校の幼児との交流学习、高校の自分・家族の学習と住居の学習において、学習プロセスを生徒自身が省察するパフォーマンス評価を導入し、その効果を検討した。生徒自身が学習の中で探究の目的を自ら決定したり意識したりすることにより、学習の動機付けが強まるとともに、努力の道筋がより明解になり探究が深まること、さらに自ら評価や省察を行うことで学習の繰り上げが可能になることが示唆された。

<キーワード>

問題解決学習、実践的推論プロセス、シティズンシップ、家庭科教育、パフォーマンス評価、プロセス評価、批判的思考、探究学習

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 22件)

- 1 荒井紀子、消費者市民(コンシューマシティズンシップ)を育むスウェーデンの教育、福井大学大学院教育学研究科教育内容教材開発研究会、平成25年度教育内容・教材開発研究会活動報告書、2015、118-137
- 2 綿引伴子・荒井紀子・鈴木真由子、スウェーデン家庭科教師の問題解決学習に対する意識と現状、金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、7号、2015、13-21(査読無)
- 3 荒井紀子、今家庭科でつけたい力 思考を育み学びをつなげる、家庭科、全国家庭科教育協会編、平成26年度3号、2014、4-9 (査読無)
- 4 荒井紀子・竹内恵子・松田淑子・鈴木真由子・綿引伴子、問題解決リテラシーにかかわる家庭科教員の力量形成 教員免許状更新講習におけるプログラム開発とその検証、日本家庭科教育学会誌、57巻、3号、2014、152-162 (査読有)
- 5 荒井紀子、子どもの思考を引き出し「つなぐ」家庭科の授業をどう創る：感じ、考え、行動し、振り返る家庭科の授業、考えるっておもしろい 家庭科で「つなぐ」子どもの思考、教育図書出版、2014、6-11 (査読無)
- 6 綿引伴子・中田泉・滝川真央、ものづくりと思考をつなぐ：オリジナルバッグの製作をとおして考える力を育む、考えるっておもしろい 家庭科でつなぐ子どもの思考、教育図書、2014、18-29 (査読無)
- 7 荒井紀子・佐藤恵美・清水美歩・吉田奈保美、「素材を味わう」をタテ糸として食の主体を育む、考えるっておもしろい 家庭科で「つなぐ」子どもの思考、教育図書出版、2014、46-59 (査読無)
- 8 中田淳平・綿引伴子・橋本正恵、子どもとおとなの思いをつなぐ：家族との関係を問いなおし自分の思いを発信しよう、考えるっておもしろい 家庭科でつなぐ子どもの思考、教育図書、2014、78-89(査読無)
- 9 塚倉知美・大嶋佳子・吉村祐美・荒井紀子、これからどう生きていく？仕事・結婚・子育てを考える、考えるっておもしろい 家庭科で「つなぐ」子どもの思考、教育図書出版、2014、100-109(査読無)
- 10 鈴木真由子・三好由紀、「あたたかい制服の着方」の工夫を日常の家庭生活に生かす、考えるっておもしろい 家庭科でつなぐ子どもの思考、教育図書、2014、112-121 (査読無)
- 11 綿引伴子・下野令子、特別支援教育とつながる家庭科：衣生活の学習をとおして学ぶ自己表現と意思決定、考えるっておもしろい - 家庭科でつなぐ子どもの思考、教育図書、2014、130-139 (査読無)
- 12 荒井紀子、「思考力・判断力・表現力の涵養とパフォーマンス評価 学力と教育評価をめぐる今日的言説と家庭科」、年報・家庭科教育研究、35集、2014、1-6 (査読有)
- 13 Noriko Arai、Home Economics as Citizenship Education in Japan The Creative Challenge of Curriculum and Practice、日本家庭科教育学会誌、56巻、4号、2014、228-233 (査読無)
- 14 荒井紀子、「学力論」と家庭科教育 世界標準の学力論からみえる家庭科教育の可能性と課題、日本家政学会誌、65巻、1号、2014、37-44 (査読無)
- 15 綿引伴子、「大豆」を題材に「身近な素材から自分の生活を見つめ、社会問題を考える」授業の有効性、日本家庭科教育学会北陸地区会30周年記念誌、2013、99-116 (査読有)
- 16 荒井紀子・高木幸子・綿引伴子、北陸家庭科研究会にみる家庭科研究の協働性理論と実践の螺旋型連関とアクションリサーチを中心に、日本家庭科教育学会北陸地区会30周年記念誌、信濃出版2013、166-182、(査読有)
- 17 長澤くみ・鈴木真由子、高校家庭科における環境配慮に対する意識と消費行動を促す授業の検討、大阪教育大学紀要第部門62巻、1号、2013、95-110(査読無)
- 18 綿引伴子、世界の家庭科 米国、荒井紀子編、新版生活主体を育む 探究する力をつける家庭科、ドメス出版、2013、31-35 (査読無)
- 19 橋本正恵・綿引伴子、中学校に幼児を招こう 幼児観察を通して企画を繰り上げ

る問題解決型の学習、荒井紀子編、新版生活主体を育む 探究する力をつける家庭科、ドメス出版、2013、189-197 (査読無)

- 20 服部晃次・鈴木真由子、家庭科教育における「自分をみつめる」学習の配慮事項の検討 家庭科教員を対象にしたヒアリング調査を通して、大阪教育大学教育学部紀要第 部門、61 巻、2 号、2013、85-93 (査読無)
- 21 服部晃次・鈴木真由子、家庭科教育における「自分を見つめる」学習の現状と課題、大阪教育大学教育学部紀要第 部門、61 巻、1 号、2012、87-97 (査読無)
- 22 綿引伴子・下野令子・北瀧理美、特別支援学校での衣生活の授業開発と有効性「着る」ということを考える学習、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、教育実践研究、38 号、2012、1-27 (査読有)

[学会発表](計 9 件)

- 1 Noriko Arai・Kaoru Arakawa, How to nurture equal partnerships between students through home economics education Focusing on Teen Date Abuse, International Federation for Home Economics: Council 2014, 2014,07.22, London, Canada
- 2 荒井紀子・佐藤恵美・清水美歩路、授業「学校を設計しよう」における生徒の協働と思考の深まり 問題解決プロセスに於いて解決案の練り上げを可能にする授業方略、第 57 回日本家庭科教育学会、2014.06.29、岡山
- 3 鈴木真由子・荒井紀子・綿引伴子、実践的推論プロセスに基づく米国家庭科の授業 地域と連携した「食」の問題解決プロジェクト、日本家庭科教育学会 2013 年度例会、2013.12.7、東京
- 4 荒井紀子、吉田奈保美、大嶋佳子、塚倉知美、生徒の思考を深める授業構造と授業方略 問題解決のプロセスを重視した住領域の授業実践をもとに、日本家庭科教育学会第 56 回大会、2013.6.30、弘前
- 5 綿引伴子、荒井紀子、鈴木真由子、スウェーデンの中学校家庭科における思考を促す食の授業 マリア・フェルド教諭の授業を事例として、日本家庭科教育学会第 56 回大会、2013.6.29、弘前
- 6 吉村祐美、荒井紀子、大嶋佳子、塚倉知、「人とかがわる力」の育成を重視した家庭科、日本家庭科教育学会例会、2012.12.01、東京
- 7 Noriko Arai, Home Economics as Citizenship Education The Creative Challenge of Curriculum and Practice, International Federation for Home Economics XXII World Congress, 2012.

7.19, Australia

- 8 Noriko Arai, The 2011 East Japan Earthquake and Home Economics Education: Lesson from the Disaster on Competencies to be developed, Oral Presentation, International Federation for Home Economics XXII World Congress, 2012.7.18, Australia
- 7 Noriko Arai, Home Economics as Citizenship Education The Creative Challenge of Curriculum and Practice, International Federation for Home Economics XXII World Congress, 2012.7.19, Australia
- 9 鈴木真由子・荒井紀子・綿引伴子、家庭科における問題解決的な学習の効果と課題 教員に対するインタビュー調査より、日本家庭科教育学会第 55 回大会、2012.6.30 東京

[図書](計 4 件)

- 1 北陸家庭科授業実践研究会 Ver.2 編、綿引伴子、高木幸子、荒井紀子、鈴木真由子他 24 名、考えるっておもしろい 家庭科でつなぐ子どもの思考、教育図書、2014、158
- 2 荒井紀子、鈴木真由子、綿引伴子他 22 名、新版 生活主体を育む 探究する力をつける家庭科、ドメス出版、2013、207
- 3 荒井紀子、鈴木真由子、長澤由喜子、野中美津枝、綿引伴子、他 5 名、大修館書店、パワーアップ! 家庭科 学びつながり発信する、2012、207
- 4 荒井紀子、大竹美登利他 3 名、日本家庭科教育学会編、Home Economics Education in Japan 2012、2012、108

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

荒井 紀子 (ARAI NORIKO)  
福井大学・教育地域科学部・教授  
研究者番号：9 0 2 1 2 5 9 7

(2) 研究分担者

鈴木 真由子 (SUZUKI MAYUKO)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：6 0 2 4 1 1 9 7

綿引 伴子 (WATAHIKI TOMOKO)  
金沢大学・学校教育系・教授  
研究者番号：9 0 2 6 2 5 4 2